

個人的長期研究ってアリですか？

山本智子

白浜で海岸生物の生態を研究する先輩として大垣さんを知ったのは、大学院に入学した頃である。そのお考えや研究の内容は、人づてに聞いたり Argonauta やその他の文献で読んだり、ということが多くて、直接お話する機会は年に1回もなかったと思う。大垣さんに対しては、あえて研究職にはつかず、フィールドの近くに住みついてまで好きな研究を続けようという、ある意味“純粹の研究者”という印象を抱き続けてきた。そのインパクトがあまりにも強すぎて、海洋生物の長期変動を明らかにするという大垣さんのライフワークを意識したのは、私自身が、モニタリングサイト 1000 や JaLTER (Japan Long-Term Ecological research Network) といった長期生態系調査に関わるようになってからである。

前述の長期調査は、大垣さんのライフワークと違って、いずれも私という研究者の探求心とは離れたところで成り立っているという側面がある。世紀をまたいで10年近く関わることになった、日本海の重油汚染影響調査。これは、1997年に座礁したロシアのタンカーから流出した重油が潮間帯の生物にどのような影響を与えたのかを明らかにしなくてはならないという、社会的要請によるところが大きい。モニタリングサイト 1000(通称モニ1000)は、環境省が旗を振る国家事業である。

野外での長期研究を続けるためには、“マンパワーの問題”“お金の問題”“時間の問題”を解決する必要がある。生態調査、特に調査区を設定して分布や生物量を複数の種について調査するなんてことは、まず間違いなく1人ではできない。大垣さんの番所崎貝類調査も、京大貝類同好会“磯こじき”のOBを中心に多くの人々が支えてきた。人が動くとお金がかかる。また、長く続けようとするれば参加者に対して何らかのインセンティブを提供する必要もあるだろう。インセンティブ次第では、“手弁当”ということも可能だが、それで安定した調査ができるかという、やはり不安である。と考えると、自然と、長期研究は「組織で」何らかの「資金源」又は調査の先に何らかの目標、つまり「インセンティブ」を共有して行うことになる。

何より乗り越えがたいのは、“時間の問題”である。人生わずか50年・・・というほどではないが、現役の研究者として、研究を主催する体力と思考力が継続するのは、どう長く見積もっても50年だろう。フィールドにでる体力はなくても、調査を企画・コントロールすることはできるし、1人の研究者の思考で貫かれた研究の方が、組織の手によって行われた長期研究よりまとまりがあるに決まっている。しかし、100年のオーダーで何かを見ようと思ったら、組織に頼らざるを得ない。また、大垣さん自身が、「紀州田辺湾の自然

史」の中で「方法論の諸問題」のひとつとして取り上げておられるように、毎回の調査努力量と継続性は反比例する可能性が高いし、調査努力量の高い精密な調査では、調査者の技量が結果を左右することもあり得るだろう。そんなこんなで、「組織的」に、「公的資金の裏付け」を得て、「ほどほどの努力量」で、「ある程度の経験があれば誰でもできる」プロトコルというところを目指していくことになる。

これはもう、“事業“である。大垣さんは、そうではない形で、長期変動を明らかにする事を目指された。多くの研究者が当然の帰結として行き着く「組織化」は最小限にし、できるところまで個人でやろうとされた意図がどこにあるのか、この選択は積極的消極的どちらの側面が強いのか、今となっては確認しようがない。個人による長期生態系研究・・・これまで述べてきたモロモロの周辺事情を考えると、この言葉そのものが矛盾しているようにも思えるのだが、大垣さんご自身は、紀州田辺湾の自然史のあとがきに、スペインのサグラダ・ファミリアと畠島の海岸生物1世紀調査を指して、「自ら生きて結果を見ることのない仕事を始める」と書かれている。サグラダ・ファミリアでは、職人による伝承や大まかな外観のデッサンなど残されたわずかな資料を元に、時代毎の建築家がガウディの設計構想を推測するといった形で現在も建設が行われている。設計と違って研究構想を引き継ぐというのは難しいかも知れないが、大垣さんが残されたのは、多くのデータと論文、Argonautaで行われた議論は、また別の思考を喚起するだろう。こんなふう引き継がれるとしたら、残された論文を通して大垣さんの思考と意志は生き続けるのではないだろうか？

(やまもと ともこ・鹿児島大学水産学部附属海洋資源環境教育研究センター)